

# 童話他

ryoma00

## 鬼六の恋

---

今まで鬼六は、全然、不思議に思ったこともありませんでした。

地獄とは、生前悪いことをした人が罰を受けるところ。

だから、自分たち鬼が、死ぬ前に悪いことをしてきた人間に罰を与えることは当たり前のことだと思ってきました。

真っ赤な炎が渦を巻きながらはるか上まで上りつめていきます。

闇と炎。そして、悲鳴だけの世界です。

その日も鬼六は、棍棒をもって、人間をぐつぐつ煮える鍋のほうへ押しやろうとしていました。いつものように、人間たちをつまんで鍋の中に入れるのです。

多くの人間たちの悲鳴がきこえます。金棒で殴られながら無理やりに鍋のほうへと歩かされます。

でも、そのとき、ひとりの若い女の人と目が合いました。

もちろん、その女性は、何度も鬼たちによって痛めつけられていたので、ぼろぼろになってました。

でも、そのとき鬼六は思い出したのです。

どうして自分が今、鬼なのかを。

そう。かつては自分も人間だったのです。人間だったころの自分は、生前人を殺してしまって、ずっと地獄で鬼たちに毎日のように拷問を受けていたのです。ある日、気がついたら鬼になっていました。人間だったころの記憶はもうありません。そして今の今まで自分はずっと鬼だったと思っていたのです。

でも、今ふと全部思い出したのです。

そう。自分はかつて人間だったと。

その女性はかつて自分が人間だったころに付き合っていた女性によく似ていました。

いえ、違います、鬼六は分かりました。なぜかは分からないけど確信したのです。

この女性はかつての自分の恋人だと。

一度、亡くなって、もう一度人間に生まれ変わって、そしてまた亡くなったのが今の彼女なのです。当時の彼女は隣村の庄屋さんの娘で、自分は当時百姓でした。人間だったころの鬼六と彼女はお互いに好きどうしでした。でも、身分の違いゆえ結ばれぬ恋。駆け落ちしようとしたところを、町の役人にみつきり、つかまりそうになったところを、無我夢中で棒切れを振り回してるうちに、当たり所が悪かったのかお役人は死んでしまったのでした。

「おまえは、いったいどんな悪いことをして、こんな地獄なんかに落ちたのたえ？」

鬼六は娘にきくと、その娘・・・かつての鬼六の恋人は答えました。

「おらには、ちっちゃい赤子さいただ。だども、こないだの飢饉で何も食えなくなった。なんも食えんから乳も出ん。悪いこととは分がってだけど、よその人んちの蔵さ入って、なんか食うもん、もらおうと思っただ。だども、そこのおかみさんがおらを見つけて、おらに向かって刃物さ持って切りかかってきただ。おらわけ分からんであがいてるうちに、おかみさんさ死んでただ」

そう言って娘はうなだれました。

ああ、なんて悲しいんだろう。

鬼六は上を見上げました。

鬼六は釜の火を消すと「どうも釜の火が消えてしまっただ」と仲間の鬼に言って、罰をとりやめました。そして、娘を自分の家に連れ込んで、床下の納屋に隠しました。

「どうして、おらを助けてくれるだ？」

娘が聞きましたが、

「いいか、声をたてるでねえぞ」

と言い残し、鬼六は家を出たのでした。

鬼六は来る日も来る日も、娘のために食べ物を届けたり、なるべく居心地がわるくならないように、いろいろと世話をするのでした。

でも、いつしかうわさは他の鬼たちに捕まり、鬼六は地獄の裁判官の前に連れ出されました。

裁判官は6尺もある、鬼の中でも大きな大鬼で、赤ら顔をさらに紅潮させて、鬼六につめよりました。雷のように大地を震わせるような大声で問い詰めるのでした。

「鬼六。お前は、この人間の娘をかばい、自分の家の納屋に隠していたな。これに異存はるまいな」  
見れば、娘が縛られ、肩をわなわな震わせています。ついに見つかってしまったようです。

「鬼六。よいか、今、おまえはここでこの娘に棍棒たたきの刑を百回するのだ。もし、できないというのなら考えがあるぞ」

でも、鬼六の考えはもう決まっていました。

「わしは、絶対にそれはできん」

「そうか」

鬼の裁判官は鬼六を睨み付けると言いました。

「もし、この娘をかばいだてすると、お前も罪人と同じように同じ罰を受けることになるぞ」  
あの怖ろしい拷問が自分にも、鬼六は自分の身体が震えるのが分かりました。

でも、鬼六は何があっても、折れようとは思いませんでした。

「鬼六さん。もうやめて。私はもう十分です。このままじゃ、鬼六さんが、鬼六さんが・・・」  
娘の涙声がこだましました。

「わしは、絶対に絶対に曲げん」

「鬼六をひったてい」

鬼六は両腕を同じ鬼に羽交い絞めにされ連れていかれました。

鬼六と娘はふたりで、なんどもそれは酷い拷問を受けました

灼熱の炎の地獄、針地獄、寒冷地獄。

でも、ふたりはどんな責めを受けても握った手を離そうとはしませんでした。

鬼たちも、今まで同じ仲間であった鬼六が責め苦を受けているのは、やはり胸がつぶされるような気分になるのでした。

同じような毎日が何日も続きました。

ある日、鬼六はとぎれとぎれの擦れる声で言いました。

「今日は、儀式に使う炎がともされる。そこでわし達はいっしょになろう」

娘は深くうなづきました。

儀式に使われる炎は地獄の天をも焦がすかというそれは大きな炎です。

これが赤から、紫から青になり、やがて白、黄色、赤、そして真っ黒な炎となってすべてを無にするという儀式なのでした。

「今日わしらはひとつになれる」

「おらたち、ひとつになれるだ」

紅蓮の炎が赤から紫になった瞬間、鬼たちの隙を見て二人は炎の中に飛び込みました。

鬼たちもこの炎ばかりは消すこともできません。

炎はさらに勢いを増して燃え続けました。

すべてを無にする炎、ここで自分たちは結ばれる。二人はそう思いました。

やがて、激しかった炎が消えると、灰の中から何かがひとつ、ぴかりと光っていました。

鬼たちが手に取ってよく見ると、それは一粒の桃色の種でした。

手に取った鬼は、ふっとため息をつく、その種を地面に投げました。

種は地面に落ちるや、すぐに目を出し、大きな木になりました。

そして、甘いようなすっぱいような実をたくさんつけました。

地獄の中は不思議な木の実の香りで満たされました。

どこかから、2羽の小鳥がやってきました。

2羽の小鳥はなかよく並び、木の実をついばむと上へ上へと飛んでいきました。

真っ暗な地獄の天井まで飛んでいくと、どうしたことが、天井が割れ青空が見えました。2羽の小鳥は青空の中へと消えていきました。

木の実の匂いはあたり一面にそそぎました。

鬼たちも、ふと何か忘れてるような気持ちを思い出したような気持ちになりました。

鬼たちは、罪の軽い罪人や、もう十分に償いをすませた罪人を解放し、天国へと送り出しました。

大きく割れた天井から見える青空はとてもまぶしく、鬼も罪人も皆一様に空を見上げました。鬼たちも金棒を

捨て、涙を流しながら流れ行く雲をただずっと眺めているのです  
「もう十分だ」誰かが言うと、皆うなづきました。  
2羽の小鳥は、きっと今どこかで仲良く暮らしていることでしょう。